日光社参史料からみた江戸時代の関東地方北部における

民家の部屋名・造作・施設

ON THE ROOM'S NAMES, CONSTRUCTIONS AND FACILITIES OF THE FARM
HOUSES IN THE NORTH KANTO AREA IN THE EDO PERIOD FROM
THE HISTORICAL MATERIALS OF NIKKOU SHASAN

津田 良樹*

Yoshiki TSUDA

The object of this paper is to consider the three items about the farm houses. The first is the name of each room about the main houses. The second is the part of construction, it is the floor, the wall and the window. The last is the facility of the farm houses, it is Toko, Closet(Oshiire), Irori, Bathroom(Yudono). It was made clear some points, as follow.

About 1770, 10~20 % of the farm houses in the village had used Kusakaki for making the wall, and still about 1840, Kusakaki was used temporally for the facility of the part of houses.

From the end of eighteenth century to nineteenth century, 30~50 % of the farm houses in the north-side of Kanto had been made up with Toko.

Keywords : farm house, historical materials, Nikkou Shasan, room's name, construction, facility

民家, 史料, 日光社参, 部屋の名称, 造作, 施設

はじめに

徳川将軍が日光に参詣する日光社参は、将軍が軍団編成をとる大勢の供侍をしたがえ、日光御成街道・日光街道を通り、日光に至っている。その間、将軍の宿泊地は岩槻・古河・宇都宮であり、将軍に供奉する供侍は将軍の宿泊地周辺の村々に下宿している。それらの村々では宿泊場所を提供するため、村内の住居の平面を調べた住居絵図帳を作成している。それら住居絵図帳のなかで、農村部に関する帳簿を、現在までに19冊見出し出している。19冊の住居絵図帳をもとに、主屋規模と平面形式、分棟型民家の消長、主屋規模・平面と階層構成・家族人数の関係については既に報告した¹⁾。本稿では、引続き民家の主屋を構成する部屋の名称、床(ゆか)・壁・窓等の造作、床(とこ)・押入・囲炉裏等の施設について検討する。

1. 部屋の名称

農家は通常土間部分と床上部分で構成される。土間部分は「どま」・「にわ」などと呼ばれ、床上部分の主な部屋についても「ざしき」・「ひろま」・「かって」などと呼ばれ、その名称には地域的な特色がみられる。そこで、

18世紀から19世紀にいたる19冊の住居絵図帳の平面に書き込まれている部屋の名称について検討する。なお、以下の項でかぎ括弧を付して用いているのは住居絵図帳に書き込まれている名称、かぎ括弧なしで用いているのはその場所を示す一般名称である。

1-1 土間・馬屋

主屋内の土間についてみると、正徳2年(1712)の下横倉村(現、栃木県宇都宮市横倉町)では「爐地」・「路じ」が当てられている。また、享保期(1716~1736)の南小倉村(現、栃木県今市市小倉)では「つち間」・「土ノ間」が当てられ、享保13年(1728)の鶴田村(現、宇都宮市鶴田町)では「土間」とともに「土地」が併用されている。一方、享保13年の岩原村(現、宇都宮市岩原町)を含めそれ以後の他の村では「土間」・「どま」が当てられている。

住居絵図帳の中では古い時期の正徳2年および享保期の場合に「爐地」・「路じ」・「土地」が使われ、明和期(1764~1772)以降はそれらが全く用いられていない。古くはこの地域では土間を「爐地」・「路じ」・「土地」と呼んでいたことになる。

「爐地」・「路じ」は、本来何もないむき出しの土地の

* 神奈川大学工学部建築学科 助手

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering
Univ. of Kanagawa

意味の「ろじ」(露地・露路・路地)²⁾を屋内の土間に当て、それらが土間に地炉を持つなどするためか、さらに、「爐」という字を当てられるようになったのではないかと推測される。『日本民家語彙集解』³⁾によると栃木県の例はないが、群馬県・山梨県などでは主屋内の土間を指す呼称としてロジが今も使われている。また、「土地」は「どじ」・「とち」・「どち」と呼称され、群馬県・千葉県などでは「どじ」と呼ばれており⁴⁾、鶴田村でも「どじ」と呼称されていたのではないかと考えられる。また、享保期の「土間」は南小倉村のように「つちま」・「つちのま」と呼称されていたと考えられるが、明和7年(1770)の川室新田村(現、今市市川室)では「とま」とされており、明和期には既にどまと呼ばれていたことがわかる。なお、天保13年の上横田・屋板村(現、宇都宮市上横田町・屋板町)では、「土間」と「台所」が土間部分に併記されている例が3軒ある。

馬屋は土間部分にみられるが、その名称をみると、明和7年の小堤村(現、茨城県総和町)の一部に「厩」が当てられる例があるが、そのほかの村では各年代を通して「馬屋」ないしは「馬や」が使われている。

1-2 広間

三室広間型の広間の如き日常生活の場と食事室をかねる部屋(以下、このような部屋を広間と呼ぶ)は、正徳2年の下横倉村および享保12年の岩原村・鶴田村では「居間」、享保期の南小倉村では「いの間」とされており、明和7年の川室新田村では「いま」と「すまい」とが併用されている。「居間」は南小倉村・川室新田村の例からみて「いのま」あるいは「いま」と読まれていたと考えられる。

明和7年の高谷林新田村(現、宇都宮市宝木本町)・上金井村(現、宇都宮市上金井町)・上戸祭村(現、宇都宮市上戸祭町)の3つの村では「台所」である。さらに、明和7年の小久喜村(現、埼玉県白岡町)、文政期(1818～1830)の茂原村(現、宇都宮市茂原町)および天保13年(1842)の上横田・屋板村では「勝手」・「勝手間」が当てられている。

明和7年の小久喜村では三室広間型の広間が前後に分けられて、前後2室とされている場合がある。後側の部屋に囲炉裏が造られ、食事など日常生活は後側の部屋に移り、前側の部屋は上手の座敷とともに接客にも使われるように変化していると考えられる。しかし、過渡期のためか、それら前・後の2つの部屋はともに「勝手間」とされている⁵⁾。また、天保13年の上横田・屋板村では四間取の下手の前側の部屋を「広間」とし、後側の部屋を「茶間」とする例がある。

1-3 座敷

しばしば主屋の上手前側に位置し、客間となる部屋(以下、このような部屋を座敷と呼ぶ)は、部屋名が書き込

まれている場合は年代にかかわらず、全て「座敷」とされている。すなわち、享保12年の岩原村・鶴田村の2村、明和期の高谷林新田村・上金井村・上戸祭村・川室新田村・小久喜村の5村、天保期の上横田・屋板村では、いずれも「座敷」あるいは「ざしき」とされている。部屋名が書き込まれていない住居絵図帳には、たとえば「八畳」とか「筵八枚」のように畳・筵枚数の書き込みがされることが多い。そのほか、正徳2年の下横倉村では平面上から判断すれば客間に当たる座敷に相当する主屋上手前側の部屋に「何畳」あるいは「物置」の記入が住居によって使い分けられている。下横倉村では座敷が畳敷の場合には「何畳」と記入し、畳が敷かれていない場合には「物置」としたと推測される。

1-4 寝間

三室広間型の上手裏側の部屋のような寝間となることが多い部屋(以下、このような部屋を寝間と呼ぶ)については、享保12年の鶴田村、明和7年の小久喜村、天保13年の上横田・屋板村で、それぞれに「へや」・「部屋」・「部屋」が当てられ、いずれもへやと呼称されていたと考えられる。また、享保期の南小倉村、安永4年の幕田村(現、宇都宮市幕田町)の2つの村では「なんど」としている。南小倉村では平面から判断して寝間に相当すると考えられる部屋に「なんど」だけでなく「物置」を当てることもある。さらに、寝間と考えられる部屋を下横倉村・上戸祭村・小堤村・江ヶ崎村などでは「物置」としている。寝間が物置として使用されているために「物置」と称したのではないかと考えられるが、明らかに雑品・雑具置場と考えられる場所に「物置」と書き入れた例もあって、その違いは定かではない。

1-5 部屋の名称

以上、各部屋の名称について検討すると、各村ごとに同一の部屋名を画一的に使っていることが多く、江戸時代の調査時点で部屋名を画一的に書き入れられた可能性があり、必ずしも当時の各家々で使用されていた呼称であるとはいえないが、部屋の名称の一般的傾向を窺うことはできる。

部屋の名称について、整理すれば、屋内の土間は正徳・享保期には「爐地」・「ろじ」・「土地」・「つち間」と呼ばれることもあったが、それ以降は「土間」・「どま」が一般的である。広間は正徳・享保期には「居間」、明和期には「台所」、文政・天保期には「勝手」と呼ばれることが多い。そのほか、明和7年の川室新田村では、日常生活の中心となる部屋であるためか広間を「すまい」としている。座敷は年代にかかわらず「座敷」とされている。寝間は「なんど」と呼ばれることもあるが、年代にかかわらず「へや」とされることが多かった。

2. 造 作

2-1 畳と葎

村の中で畳が使用されている住居の割合

住居絵図帳および住居絵図帳に付随する文書を合わせ、畳数の坪数ないしは枚数が判明するものについて整理したものが表一である。

全村の中で畳が使われている住居の割合は、享保期の南小倉村は2.5割ほどである。また、明和期の高谷林新田村・上金井村・上戸祭村、文政期の下蓮田村（現、埼玉県蓮田市蓮田）、天保期の上横田・屋板村の各村では年代差があるにもかかわらず、いずれも3.5～4割ほどである。さらに、明和期の箕輪村（現、埼玉県岩槻市箕輪町）は5割、文政期の田中村は7割ほど、天保期の浮谷村（現、岩槻市浮谷）は7割近くとなる。一般的には、年代が降るにともなって畳が住居へ敷かれる割合が高くなる傾向を窺うことができる。しかし、同じ明和期の他村に較べ5割と高い割合を示す箕輪村や、逆に2割ほどと低い割合の小堤村もある。また、同じ文政期でも田中村の7割ほどに較べ、3.5割ほどと低い下蓮田村の例もあり、村による差も大きい。

また、下横倉村では、正徳2年に約2割（33軒中6軒）の住居に畳が使用されていたが、60年ほど後の安永4年には4.5割（22軒中10軒）に上がる⁶⁾。しかし、さらに50年ほど後の文政6年には約2割（17軒中3軒）に下がっている⁷⁾。北関東農村の荒廃化を端的に示している下横倉村では⁸⁾、この100年ほどの間に戸数が半分に激減しており、そのような状況の下では当然のことながら畳の使用についても極めて特異な様相を示している。

畳と葎の使用状況

1軒当りの畳使用坪数についてみると、享保期の南小倉村、明和期の高谷林新田村と上金井村では畳数の部屋が2室以下と考えられる16畳以下の場合がほとんどである。一方、文政期の下蓮田村、天保期の上横田・屋板村と浮谷村では17畳以上の畳数が相当数を占めている。これらの点からみて、畳を使用する住居の一軒当りの畳枚数は明らかに増加している。

享保期の南小倉村住居絵図帳の37軒のうち畳数・葎数の別が判明する19軒についてみると、畳を使用する住居は5軒で、それらの畳枚数は18枚が1軒、16枚が2軒、14枚が1軒、8枚が1軒である。畳を使用する5軒のうち4軒は2室を畳敷とし、残る1軒は1室だけ畳敷である。1室だけ畳敷の1軒は広間の上手前側の部屋に畳を敷き座敷とし、その後側の部屋は「なんど」である。2室畳敷の4軒はいずれも広間の上手に畳敷の2室を前後に配しており、前後に2間続きの畳部屋を持って

表一 畳数と軒数

	～8畳 (4坪)	～16畳 (8坪)	～24畳 (12坪)	～32畳 (16坪)	～40畳 (20坪)	～48畳 (24坪)	～56畳 (28坪)	～64畳 (32坪)	割合
正徳期下横倉村	—	[4]	[1]	[1]	—	—	—	—	6/33=0.18 ¹⁾
享保期南小倉村	1	3	1	—	—	—	—	—	5/19=0.26
明和7年高谷林新田村	2	3	—	—	—	—	—	—	5/12=0.42
明和7年上金井村	6	2	1	1	1	—	—	1	12/32=0.38
明和7年上戸祭村	7	7	—	1	—	—	—	—	15/42=0.36
明和7年江ヶ崎村	13	5	3	1	1	—	1	—	24 ²⁾
明和7年箕輪村	5	2	2	—	1	1	—	—	11/22=0.50
明和8年小堤村	9	5	3	2	—	—	—	2	21/93=0.23
安永4年幕田村	17	2	—	—	—	—	—	—	19 ²⁾
文政期田中村	9	3	1	1	1	2	—	—	17/24=0.71
文政7年下蓮田村	6	8	3	5	3	1	—	—	26/76=0.34
天保13年上横田・屋板村	9	1	3	2	2	1	—	—	18/45=0.40
天保13年浮谷村	10	8	11	7	4	2	2	—	44/66=0.67

1) 下横倉住居絵図帳には畳数と明記されていないが、「八畳」の如き書き込みと「物置」との書き込みが使い分けられているので、この「八畳」の如き書き込みは畳数を示しているのではないかと考えられる。
2) 幕田村・江ヶ崎村住居絵図帳では、村内の3～5割ほどの住居が省略されており、使用率は不明である。

表二 畳数と葎数の併用関係（畳は畳数、薄は薄縁、葎は葎数を示す。数字は軒数）

	畳	畳・薄	畳・薄・葎	畳・葎	薄	薄・葎	葎	なし	合計
享保期南小倉村	—	—	—	5	—	—	14	—	19
明和7年高谷林新田村	—	—	—	5	—	—	7	—	12
明和7年上金井村	—	—	—	12	—	—	20	—	32
明和7年上戸祭村	1	—	—	14	—	—	27	—	42
明和7年箕輪村	—	6	4	1	—	6	5	—	22
明和8年小堤村	—	1	—	19	—	—	71	1	92 ¹⁾
文政期田中村	1	—	—	16	—	—	7	—	24
文政7年下蓮田村	8	3	1	14	2	5	43	—	76
天保13年上横田・屋板村	1	—	—	17	—	—	27	—	45

1) 2軒は不明。そのうち1軒は名主の住居であるが住居図の1部分しか残っていないため全貌は不明であるが畳を所持していることはわかる。

いたと考えられる。葎は19軒全戸が使用しており、葎の枚数が25～29枚が6軒、20～24枚が2軒、15～19枚が8軒、10～14枚が3軒である。このうち、3室を葎敷するものが1軒、2室を葎敷とするものが13軒、1室のみ葎敷とするものが5軒である。1室のみ葎敷とする5軒はいずれも畳を使用する住居である。また、19軒すべてが広間に当たる部屋を葎敷にしており、畳・葎の書き込みがない19軒以外の住居図にも広間に「むしろしきば」と書き込むものが9軒あり、享保期の南小倉村においては広間は葎敷が一般的であったと考えられる。

明和7年の高谷林新田村では1室のみ畳敷の3軒は、三室広間型の広間の上手前側の座敷に相当する部屋を畳敷とする。2室畳敷とする2軒は、広間上手の前後の2部屋に畳部屋を配している。三室広間型の平面では、広間の上手前側の部屋（すなわち座敷）に、まず畳が敷かれる例が上金井村などでも確認できる。畳が2室に敷かれる場合は、前記2村同様に広間の上手前後の部屋（すなわち、座敷およびその後側の部屋）に配される例が文政7年の下蓮田村に4軒存在するが、天保13年の浮谷村では座敷に次いで広間に畳が敷かれる例が7軒あり、広間の上手前後の2部屋を畳敷にする例はない。

文政7年の下蓮田村住居絵図帳の四間取住居に畳が敷かれた例についてみると、前側の2室に畳が敷かれたものが2軒、座敷後側の寝間を除く3室に畳が敷かれたものが2軒、4室全てに畳が敷かれたものが7軒である。すなわち、下蓮田村の四間取では、まず上手前側の座敷に畳が敷かれ、次いで土間沿いの前側の部屋、さらに土間沿いの後側の勝手、そして最後に座敷後側の寝間の順

に畳が敷かれて行くと考えられる。前記のように、広間型の場合には、同じ下蓮田村でも、まず座敷に畳が敷かれ、次いで座敷後側の部屋に敷かれており、四間取の場合は広間型と順番が異なっている。

畳・薄縁・筵の併用関係について整理したものが表—2である。

畳敷だけの書き入れしかない浮谷村を除き、9村の主屋は小堤村の1軒を除いて、畳・薄縁もしくは筵を必ず用いている。筵敷がなく畳敷だけもしくは畳敷と薄縁敷の住居は南小倉村・高谷林新田村・上金井村には1軒もなく、箕輪村に6軒、田中村に1軒、下蓮田村に11軒、上横田・屋板村に1軒ある。畳敷の住居が多い箕輪村と田中村についてみると、箕輪村では、畳敷だけの住居はないが、畳敷と薄縁敷の併用が6軒（3割弱）、畳敷と薄縁敷と筵敷の併用が4軒（2割弱）、畳敷と筵敷の併用が1軒である。一方、田中村は、畳敷だけが1軒、畳敷と筵敷の併用が16軒（6.5割）を占めている。田中村は畳敷の住居が多いが、その大部分が筵敷との併用であるのに対し、箕輪村では筵敷がなく畳敷と薄縁敷だけの住居が比較的多い。下蓮田村でも畳敷だけおよび畳敷と薄縁敷で筵敷のない住居が11軒あり⁹⁾、箕輪村に近い傾向を示している。

箕輪村・下蓮田村以外の村では畳敷だけの住居が全くないか、あるいは極めて少ない。筵敷のない畳敷だけおよび畳と薄縁の住居についてみれば、箕輪村・下蓮田村の2村は際だって多く、2村はともに岩槻に近い村であり、江戸に近いという地域的特色ではないかと考えられる。

筵敷が使われている状況を示したのが表—3である。17～24枚を中心に、9～16枚、25～32枚が多くを占めており、村によってこのいずれかが多数を占める。畳敷に比べ筵敷の枚数が多いが、畳敷と筵敷とが補完関係にあり、畳敷が多くなると筵敷が少なくなるが、全体的には筵敷が主流である。

2-2 壁

明和7年の高谷林新田村と上戸祭村および天保13年の上横田・屋板村の3冊の住居絵図帳の平面には、壁の種類が書き込まれている。平面の書き込みにしたがえば、3村ともに「かべ」・「ハメ」・「クサカキ」の3種類の壁が使用されている。「カベ」は壁で土壁、「ハメ」は「羽

目」・「板ハメ」と記入されることもあり¹⁰⁾、板壁である。「クサカキ」は「草垣」・「カキ」・「わらかき」と記入されることから、草・藁で作られた壁である¹¹⁾。

高谷林新田村についてみると、外壁は以下の通りである。

＜明和7年高谷林新田村住居の外壁の種類＞

・「かべ」だけ	3軒
・「かべ」「ハメ」の併用	3軒
・「かべ」「ハメ」「クサカキ」の併用	3軒
・「かべ」「クサカキ」の併用	1軒
・「ハメ」「クサカキ」の併用	1軒
・「クサカキ」だけ	1軒

「かべ」だけの場合、「かべ」と「ハメ」の2種類を併用する場合、「かべ」・「ハメ」・「クサカキ」の3種類を併用する場合がそれぞれ3軒である。「かべ」と「クサカキ」を併用する場合、「ハメ」と「クサカキ」を併用する場合、「クサカキ」だけの場合がそれぞれ1軒である。

「かべ」と「ハメ」を併用する場合は、土間廻りおよび背面を「かべ」に、座敷廻りや正面を「ハメ」にしている。「かべ」・「ハメ」・「クサカキ」を併用する場合は、背面および床上部分の側面を「かべ」に、馬屋廻りを「クサカキ」に、正面のごく一部分だけ「ハメ」にしている。「かべ」と「クサカキ」を併用する場合は、馬屋廻りだけを「クサカキ」とし、残る大部分は「かべ」である。「ハメ」と「クサカキ」を併用する場合は、「ハメ」を正面のごく一部分に使用する。

一方、間仕切壁については記入もれがあり、全て記入されているわけではないが、馬屋と土間境には「かべ」を使用する場合が6軒、「クサカキ」を使用する場合が2軒あるが、「ハメ」を使用する例はない。床上部分の間仕切は「ハメ」が多いが、座敷と寝間境等を「クサカキ」にする場合が3軒ある。特に広間（高谷林村住居絵図帳では「台所」と記される）と座敷境に壁が設けられる場合は、8軒中7軒が「ハメ」としている。

明和7年の上戸祭村についてみると、外壁を全て「かべ」とする場合が、42軒中38軒あり、最も多い。「かべ」と「ハメ」の併用は1軒で、「ハメ」は正面の一部分に使用している。残る3軒は「クサカキ」だけの住居で、3軒とも小規模である。このうちの、1軒は水呑百姓である。内部の間仕切壁は、記入される例が少なく、「ハメ」を使用する場合が3軒、「かべ」が2軒、「かき」が1軒認められるだけである。外壁では「ハメ」がほとんど使用されていないにもかかわらず、間仕切壁の種類がわかる6軒のうち3軒に「ハメ」がみられ、間仕切壁には「ハメ」が使用されることが多かったと推測される。

天保13年の上横田・屋板村についてみると、「かべ」・「ハメ」・「クサカキ」の併用関係は以下の通りである。

表—3 筵敷と軒数

	～8枚 (4坪)	16枚 (8坪)	24枚 (12坪)	32枚 (16坪)	40枚 (20坪)	48枚 (24坪)	56枚 (28坪)
享保期南小倉村	0	7	6	6	—	—	—
明和7年高谷林新田村	0	2	3	6	1	—	—
明和7年上金井村	2	8	11	5	5	—	1
明和7年上戸祭村	1	6	16	9	6	3	—
明和7年箕輪村	5	8	2	1	—	—	—
明和8年小堤村	20	16	19	24	8	2	1
文政7年下蓮田	4	22	20	15	2	—	—
文政期田中村	3	4	9	6	1	—	—
天保13年上横田・屋板村	2	14	20	7	1	—	—

＜天保12年上横田・屋板村住居の外壁の種類＞

・「かべ」「ハメ」の併用	18軒
・「かべ」だけ	14軒
・「クサカキ」	5軒
・「ハメ」だけ	4軒
・「かべ」「クサカキ」の併用	2軒
・「ハメ」「クサカキ」の併用	2軒

外壁に「かべ」と「ハメ」を併用する場合が18軒と最も多く、その内ほとんどの部分が「かべ」で正面などの一部分のみ「ハメ」にするものが11軒ある。次いで「かべ」だけが14軒で、外壁に「かべ」を主に使用する住居が全体の3分の2を占めている。一方、外壁に「クサカキ」だけ使用する住居が5軒あり、この中には「仮小屋」と註記された小規模な住居が4軒含まれている。また、「ハメ」だけは4軒で、この中に規模が最も大きい庄屋の住居が含まれている。

これらの3村のほかに、住居絵図帳には壁の種類が記入されていないが、明和7年の上金井村および小堤村では、「クサカキ」を使用する住居にその旨を註記している。上金井村では、26軒のうち5軒が「クサカキ」で、この5軒は8坪～21坪の住居で村内では比較的小規模である。また、26軒のうち8軒には宿舍提供から除いたと考えられる「除き」の註記があるが、「クサカキ」を使用する5軒はいずれも「除き」とされている。一方、小堤村では98軒中21軒が「クサカキ」である。この21軒のうち17軒は「見苦敷家ニ付…除」かれた住居である。残る4軒は35坪ほどの住居で、小堤村では中規模以上である。

以上のように、村によって多少異なるが、明和期頃には茅壁と考えられる「クサカキ」を使用する住居が、村全戸の1～2割ほど存在し、それは宿舍提供用からは外されることが多く、粗末な住居の壁材と考えられていたようだ。また、天保期になっても「クサカキ」は壁材として使用される例があり、「仮小屋」などに使用されることが多かった。一方、明和期には大部分の住居で「かべ」が使用されていたが、天保期になると「ハメ」を使用する例が増え、年代が降るにつれて「ハメ」を多用する傾向が認められる。

2-3 建 具

住居絵図帳より建具が判明する村は、明和7年の高谷林新田村と上戸祭村および天保13年の上横田・屋板村である。

明和7年の高谷林新田村住居絵図帳には「大戸口」・「戸」・「口」の別が示されている。「大戸口」には大戸が建て込まれていたと考えられる。「戸」・「口」は同一住居図内において使い分けられており、異なる柱間装置と考えられる。しかし、外廻りの開口部および内部間仕切りのいずれにも「戸」・「口」が当てられ、使用場所か

らは両者の違いは認められない。

明和7年の上戸祭村住居絵図帳では、外廻り開口部に「戸」と書き込まれている。内部間仕切には「戸」・「障子」・「唐紙障子」と書き込まれていて使い分けられている。「障子」は4例、「唐紙障子」は1例である。「戸」は板戸、「唐紙障子」は現代の用語では襖、「障子」は古い用語の明り障子である。

天保13年の上横田・屋板村住居絵図帳の平面では外廻り開口部に「大戸」・「戸」・「雨戸」の別が示されている。表出入口には「大戸」をたてる。開口部には「戸」が原則で、ほかに縁の外側に「雨戸」と記される例が2軒ある。縁の外側に「戸」と記されている住居も2軒あり、縁の外側の建具が「雨戸」とは限らない。

「戸」と縁との関係についてみると、明和7年の高谷林新田村では12軒全戸が縁の内側に戸を建て込み、縁は濡れ縁としている。同じ明和7年の上戸祭村では判明する27軒のうち25軒は縁の内側に戸を建て込み、縁の外に「戸」を建て込む住居が2軒のみである。上横田・屋板村では23軒のうち19軒は縁の内側に「戸」を建て込み、4軒が縁の外に「戸」または「雨戸」を建て込んでいる。明和期から天保期にかけて、「戸」を縁の外側に建て込む例が増えてはいるが、天保期でも大部分は縁の内側に「戸」を入れ、濡れ縁としている。これらの例からみると、宇都宮周辺の村においては、幕末期に至っても縁の外側に雨戸を設ける例は多くなかった。

2-4 格子窓

広間の正面に設けられたしし窓と思われる格子窓が、享保13年の鶴田村、明和7年の高谷林新田村および天保13年の上横田・屋板村の住居絵図帳にみられる。それらを鶴田村では「れんじ」と記入し、高谷林新田村では「コウシ」とし、上横田・屋板村では「サマ」としている。「れんじ」は連子であり、同様に「コウシ」は格子であり、それぞれ連子窓、格子窓を指していると考えられる。また、「サマ」は狭間、これも格子窓を指す呼称である。このほか明和7年の上金井村でも4軒の住居図には「連子」あるいは「中敷居」の書き込みがあり、窓の存在が確認できる。中敷居の窓の形態は明らかでないが、床面より50センチほど上に中敷居を入れて格子窓とする重要文化財旧伊藤家住宅(川崎市立日本民家園)のような窓と推測される。

享保13年の鶴田村では、全戸46軒のうち43軒に「れんじ」が設けられている。「れんじ」がない3軒は、いずれも小規模な住居である。また、明和7年の高谷林新田村では、全戸12軒に「コウシ」が設けられている。さらに、天保13年の上横田・屋板村でも、半数ほどを占める45軒中23軒に「サマ」がある。そのほか、鶴田村では百姓家の同一敷地内に設けられた10軒の隠居屋のうち8軒に「れんじ」が設けられ、上横田・屋板村の

2軒の隠居屋にも「サマ」があり、主屋だけではなく隠居屋にも格子窓を設けるのが一般的であった。

このように、宇都宮周辺では享保期・明和期にほとんどの住居に格子窓が設けられ、天保期においても全戸数の半数ほどの住居に格子窓が設けられており、宇都宮周辺地域の多くの住居は格子窓を設けるのが一般的であったと考えられる。なお、この格子窓は天保期には5割ほどに減少しているが、上横田村に天保9年に建てられた稲見家住宅にも格子窓が造られており¹²⁾、天保期においても新築住居に造り付けられていた。

3. 施 設

3-1 床 (とこ)

住居絵図帳から床を設ける住居の数を表—4に示す。床らしきものとは、座敷など一般に床が設けられる場所に奥行半間ほどの床と同じ形式の場所を設けた場合を指し、床と明記された場合と区別している。

享保12年の鶴田村住居絵図帳には、床と明記された住居はなく、床らしきものが描かれた住居が7軒ある。このうちの5軒は間口1間、奥行1尺ほどで、押板と呼ばれることの多い形式と考えられる。

明和期の川室新田村では2軒、上戸祭村では6軒(内、床らしきもの3軒)、小久喜村では名主の住居1軒、箕輪村では4軒(内、床らしきもの1軒)に床が設けられている。これらは全戸の2割に満たない。

同じ明和期の高谷林新田村では全戸12軒のうちの5軒に床があり、小堤村では全戸数94軒のうちの37軒(内、床らしきもの4軒)に床がある。両村では全戸数の4割ほどの住居に床を設けていたことになる。

天保13年の上横田・屋板村では床は2軒にしかないが、床らしきものは12軒にあり¹³⁾、併せて14軒になる。同時期の浮谷村では31軒(内、床らしきもの6軒)に床が設けられている。上横田・屋板村では全戸数の3割ほど、浮谷村では5割ほどの住居に床が設けられていた

ことになる。

明和期の川室新田村・小久喜村・箕輪村では村役人層しか床を持っていない。また、同じ明和期の小堤村では約3.5割、高谷林新田村では約4割が床を設けている。さらに、天保期の浮谷村では約4割が床を設けている。

以上から、江戸時代後期の北関東の農村では全戸数の4割ほどの住居に床が設けられていることが珍しくなかったことがわかる。

3-2 収 納 (含む仏間)

押入・戸棚については、押入もしくは戸棚らしく図が描かれることは多いが、「押入」・「戸棚」と明記されている場合は比較的少ない。また、「押入」・「戸棚」などと明記されていても、どのような違いがあるか判然としない。ここでは、住居絵図帳の記載をそのまま取り上げ検討する。

仏間を含め押入・棚・物置など部屋に造り付けられた収納を整理したものが表—5である。1軒の住居に2種以上の収納場所を設けていることもあり、その場合はこの表では重複して数えられている。

明和7年の高谷林新田村住居絵図帳では間口1間奥行半間ほどの部分に「押込」と記入される例が4軒ある。このうち2軒の「押込」は座敷の床の脇に配されており、他の2軒は広間(高谷林新田村住居絵図帳では「台所」と記入される)の後方土間寄りに配されている。一方、広間の後側に配され、規模も「押込」とほぼ同じで「棚」とされるものが3軒ある。広間後方に配された「押込」・「棚」はいずれも平面上の位置からみて、食器類などを入れる戸棚と思われる。「押込」と「棚」の違いは絵図からでは明らかではないが、造られている場所から戸棚の方が段数が多く、建具も細かく分かれているのではないかと考えられる。

明和7年の箕輪村では、間口1間奥行半間ほどの造り付けの収納場所に「ヲシ入」と書き込む例が8軒、「と

表—4 床

		軒数	割合
享保13年	鶴田村	床らしきもの 7	7/46
明和7年	川室新田村	床 2	2/46
明和7年	高谷林新田村	床 5	5/12
明和7年	上戸祭村	床 3	
		床らしきもの 3	6/42
明和7年	小久喜村	床 1	1/22
明和7年	江ヶ崎村	床 7	
		床らしきもの 4	11/55
明和7年	箕輪村	床 3	
		床らしきもの 1	4/22
明和8年	小堤村	床 33	
		床らしきもの 4	37/92
天保13年	上横田・屋板村	床 2	
		床らしきもの 12	14/45
天保13年	浮谷村	床 25	
		床らしきもの 6	31/61

表—5 収 納

	軒数	割合
明和7年高谷林新田村		
押込	4軒	4/12=0.33
棚	3軒	3/12=0.25
仏間	6軒	6/12=0.50
なし	5軒	5/12=0.42
明和7年箕輪村		
ヲシ入	8軒	8/22=0.36
とだ奈	3軒	3/22=0.14
持仏	7軒	7/22=0.32
なし	6軒	6/22=0.27
文政7年下蓮田村		
押入	8軒	8/76=0.11
戸棚(板棚)	3軒	3/76=0.04
天保13年浮谷村		
押入	44軒	44/61=0.72
持仏	11軒	11/61=0.18
なし	12軒	12/61=0.20

だ奈」と書き込まれた例が3軒ある。そのほか「物置」と書き込む場合もある。「ヲシ入」・「とだ奈」・「物置」は平面ではいずれも囲炉裏近くの広間あるいは勝手の後方に設けられた収納場所で、その違いは不明である。しかし、同一の住居図のなかで「ヲシ入」・「とだ奈」が使い分けられており、棚板の有無などの違いがあるのではないかと推測される。

文政7年の下蓮田村では「押入」と書き込む例が8軒、「戸棚」と書き込む例が2軒、「板棚」が1軒みられる。下蓮田村の「戸棚」・「板棚」は土間に突き出した囲炉裏を囲む板敷の後方に設けられており、食器類を入れる棚であろう。下蓮田村では囲炉裏近くの棚を「戸棚」・「板棚」、座敷や寝間などに設けられる物入に「押入」と書き込む例が多いが、一部に囲炉裏近くの収納場所に「押入」と書き込む例がある。

天保13年の浮谷村では61軒の住居のうち44軒に「押入」がみられる。「戸棚」は名主の住居の勝手の上手寄りの後方に設けられた収納場所に書き込まれている例だけである。そのため、座敷や寝間の場合も、土間の炊事場前や囲炉裏後方の場合もすべて「押入」である。

そのほか、表—5には示していないが、明和8年の小堤村では、床脇の間口1間奥行半間の部分に「ヲシコミ」と書き込まれた例が3軒、「物置」と書き込まれた例が6軒ある。

文政期の田中村では、3坪ほどの寝間ではないかと思われる小部屋に「押入」と書き込んでいる。

他の村では収納場所が省略されたと考えられないこともないが、上記の村では明和期には「押込」・「ヲシ入」などの収納場所が3割ほどの住居にみられる。天保13年の浮谷村では、「押入」が全戸数61軒のうち44軒にあり、7割ほどの住居に設けられていたことがわかる。

また、収納場所ではないが仏壇を置く場所である仏間を設ける住居が多く、高谷林新田村で6軒、箕輪村で7軒、浮谷村で11軒の住居に「持仏」あるいは「仏間」がみられる。高谷林新田村では「仏間」のある6軒全てが三室広間型の広間の後方に間口1間奥行半間ほどの「仏間」を設けている。箕輪村では四間取・広間型などの座敷の後方に0.5坪かそれより小さいほどの「持仏」を設けるが、当村には床（とこ）が少ないこともあってか、床と並べて配される例は2例のみである。浮谷村では四間取・広間型などの座敷の後方に11例中10例までが床と並べて、間口1間奥行半間ほどの「持仏」を設けている。

3-3 囲炉裏と竈

囲炉裏の有無が判明する住居絵図帳は、明和期の川室新田村・江ヶ崎村・箕輪村・小堤村、文政7年の下蓮田村、天保13年の上横田・屋板村の6冊である。

明和7年の川室新田村と江ヶ崎村および天保13年の

上横田・屋板村では住居絵図帳に書き上げられた全住居に囲炉裏がみられる。また、明和期の小久喜村・箕輪村・小堤村および文政7年の下蓮田村の4つの村では記入もれのため小規模な住居で囲炉裏の記入がない例が少数あるが、ほぼ全部の住居に囲炉裏がみられる。以上のように、囲炉裏は村の全ての住居にあったと考えられる。また、明和8年の小堤村では全戸94軒のうち名主の住居を含め2軒には2箇所囲炉裏を設けている。さらに、天保13年の上横田・屋板村では45軒のうち9軒で囲炉裏を2箇所に設けている。一般に2箇所に囲炉裏がある住居は、囲炉裏の1つを四間取の下手後側に位置する日常生活の中心となる勝手に配し¹⁴⁾、もう1つを土間に張り出した板敷部分に配することが多い。1箇所にのみ囲炉裏を設ける住居では、日常生活を営む広間あるいは勝手に囲炉裏を設けている。三室広間型や一間取の場合は土間沿いの広間、整形四間取あるいは喰違四間取では床上部分土間沿いの後側の勝手、広間の後側に寝間を配する四間取では土間沿いの前側の部屋（広間）に囲炉裏を設ける。そのほか、広間や勝手から土間に張り出す板敷が発達する文政7年の下蓮田村および天保13年の上横田・屋板村ではこの板敷部分に囲炉裏を設けることがある。

囲炉裏の呼称についてみると、明和期の小堤村・江ヶ崎村および文政7年の下蓮田村では「イロリ」とあり、明和7年の川室新田村および天保13年の上横田・屋板村では「ろ」としている。明和7年の箕輪村では一般的には「イロリ」で、「クド」・「クド・イロリ」がそれぞれ1例ずつある。小久喜村では「クド」と記入されている。小久喜村の「クド」の位置は、小堤村・江ヶ崎村・下蓮田村の「イロリ」と同位置にあるにもかかわらず、小久喜村では「クド」であり、小堤村などの「イロリ」と同じと考えられる。箕輪村の例では床上の囲炉裏と思われるものに「イロリ」と「クド」を使い分け、「イロリ・クド」と併記される場合もあり、これは「クド」も「イロリ」も意味が変わらないことを示していると考えられる¹⁵⁾。また、床上部分の囲炉裏のほかに、土間に竈を設ける住居もある。箕輪村では土間に竈と考えられる「かまだん」¹⁶⁾と書き込まれている例が4軒、土間に「クド」と書き込まれる例が3軒、竈らしき図を描く例が2軒ある。すなわち、箕輪村では囲炉裏のほかに土間に竈を設ける場合が9軒あったと考えられる。

小堤村では土間の後寄りに「釜」と書き込まれた例が26軒みられ、これも竈を示していると考えられる。「見苦敷分」を除き御上へ提出された52軒についてみると¹⁷⁾、52軒のうち24軒に「釜」の記入がある。この記入は村方控の住居絵図では2例だけで省略されたと考えられる。

囲炉裏のない住居はないが、2つある住居が明和8年

の小堤村でごく一部に、天保13年の上横田・屋板村で2割みられる。1箇所設ける住居では広間あるいは勝手に囲炉裏があり、2箇所設ける住居では広間あるいは勝手と土間に張り出した板敷に設けている。

竈は、記入もれがあると考えられるが、明和期の小堤村・箕輪村では村内の3～4割の住居で囲炉裏と竈が併用されていたことがわかる。

3-4 湯 殿

「湯殿」¹⁸⁾・「湯場」¹⁹⁾と記入されている0.5坪ほどの部屋が、明和期以降の住居絵図帳にみられる。

明和7年の川室新田村では、大戸口の上手脇の軒下に0.5坪ほどの広さの「ゆどの」が4軒にある。同じ明和7年の箕輪村では、主屋の土間より前方に突き出た馬屋のさらに前方の軒下に「ゆどの」を設ける住居が1軒ある。

明和8年の小堤村でも大戸口の下手脇に0.25～0.5坪ほどの「湯殿」を設ける住居が6軒ある。名主の住居は大戸口の上手脇の土間内に「湯殿」を設け、ほかに床から直接使用できる客用ではないと思われる「湯殿」を持っている。また、主屋の背後に突き出した裏部屋に接続して、「風呂」を設けた例も1軒ある。

文政7年の下蓮田村では76軒中21軒に1～2坪ほどの「湯殿」を設けている。そのうちの17軒までが土間から突き出た馬屋のさらに前方に「湯殿」を設けている。

天保13年の浮谷村では、62軒中15軒が1～2坪ほどの「湯殿」を設けている。馬屋のない3軒を別として、浮谷村では12軒が土間から突き出した馬屋のさらに前方に「湯殿」を設けている。江戸時代には「湯殿」の排水も肥料に役立てたことも「馬屋」と「湯殿」を近接させた一因ではないかと考えられる。「湯殿」の規模が大きいことも下蓮田村と同様である。また、浮谷村では床から直接利用できる「湯殿」を上雪隠わきに設ける例が2軒あり、1軒は名主を務める住居、もう1軒は床・棚を備えた座敷を持つ百姓の住居である。

以上のように、明和期の川室新田村・箕輪村・小堤村では村のごく一部の住居だけに「湯殿」・「湯場」がみられる。ところが、文政期の下蓮田村や天保期の浮谷村では全戸数の2～3割ほどの住居に「湯殿」・「湯場」がみられるようになる。

3-5 上雪隠と上湯殿

主屋床上部分に接続して設ける上雪隠²⁰⁾は、6つの村の住居絵図帳に描かれている。それら6つの村は鶴田村・小堤村・箕輪村・江ヶ崎村・下蓮田村・浮谷村である。

享保12年の鶴田村では庄屋の住居の離座敷の縁側の先端に、上雪隠が描かれている。

明和7年の箕輪村では2軒、江ヶ崎村では1軒の住居に、座敷の背後に上雪隠らしき図が描かれている。それ

表—6 上雪隠

年代・村名		軒数	割合
享保13年鶴田村	上雪隠らしきもの	1	1/46
明和7年江ヶ崎村	上雪隠らしきもの	1	1/55
明和7年箕輪村	上雪隠らしきもの	2	2/22
明和8年小堤村	上雪隠	1	1/94
文政7年下蓮田村	上雪隠	7	7/76
	上雪隠らしきもの	1	1/76
天保13年浮谷村	上雪隠	12	12/61

らはいずれも名主など村役人の住居である。明和8年の小堤村でも名主の住居に上雪隠があり、座敷の背後に2ヶ所設けられ「雪隠」と記入されている。

文政7年の下蓮田村では8軒の住居に上雪隠らしき図が描かれ、その内の7軒に「雪隠」と記入されている。この8軒の中には2名いる名主の住居は含まれているが、2名の百姓代の住居は含まれていない。

天保13年の浮谷村では、12軒の住居に「雪隠」との記入がある上雪隠らしき図がみられる。この12軒の中には名主および百姓代の2軒は含まれるが、組頭は2軒ともに含まれていない。

以上のように、上雪隠は村役人層の住居に設けられることが多いが、文政期と天保期には、村役人の住居に必ずしもみられるとは限らない。「雪隠」と明記されたものに限ってみると、文政7年の下蓮田村では全戸数の1割ほど、天保13年の浮谷村では2割ほどに上雪隠があった。

上雪隠は、一般に主屋上手の後隅に接して設けられる。縁側を通して上雪隠へ至る場合が多く、配置上矩折に曲がった縁側が設けられることになる。上雪隠は2室に分かれ、一方に小便器を描く例が、文政7年の下蓮田村に3軒、天保13年の浮谷村に6軒ある。以上のように、文政期には既に一部百姓の住居に小便所・大便所を別にした上雪隠が設けられていた。

湯殿が上雪隠と同様に主屋床上部分に接続して設けられることがある。

明和8年の小堤村では2軒、天保13年の浮谷村でも2軒の住居にこのような湯殿がみられる。小堤村の1軒は名主の住居で、座敷横の縁側に接した1坪弱の1室に、「湯殿」と記入されている。この名主の住居には主屋内の土間部分にも「湯殿」があり、土間の「湯殿」が家族用、座敷近くの「湯殿」は客用であろう。小堤村のもう1軒は、主屋背後に指し出された裏部屋の後隅に接した1坪弱ほどの一室に「風呂」と記入されている。裏部屋は庭敷で「物置」と記入された部屋であり、これに接する「風呂」は客用とは考えられない。「湯殿」と「風呂」が同じ住居絵図帳の中で使い分けられており、「風呂」は蒸風呂を指しているのではないかと考えられる。

天保13年の浮谷村の2軒は名主および百姓の住居である。この2軒はともに座敷の脇に上雪隠と並べて「湯

・殿」を設けている。2軒ともに主屋の土間下手前方に突き出した馬屋のさらに前方に「湯殿」のある住居である。

以上のように、上雪隠は、享保12年の鶴田村および明和期の江ヶ崎村・箕輪村・小堤村の名主あるいは庄屋などの村役人の1~2軒の住居にしか設けられていなかったが、文政7年の下蓮田村では1割ほど、天保13年の浮谷村では2割ほどの一般百姓を含む住居に設けられている。一方、客用と考えられる上湯殿の例は少なく、天保期に至っても、名主などごく限られた一部の住居にだけみられる。

おわりに

主屋を構成する部屋の名称について、要約すれば以下の通りである。

- ① 土間は、正徳・享保期には「爐地」・「路じ」・「土地」・「つち間」と呼ばれることもあったが、明和期以降は「土間」・「どま」が一般的である。
- ② 広間は、正徳・享保期には「居間」、明和期には「台所」、文政・天保期には「勝手」と呼ばれることが多い。
- ③ 座敷は、年代にかかわらず「座敷」と呼ばれている。
- ④ 寝間は、「なんど」と呼ばれることもあるが、年代にかかわらず「べや」と呼ばれることが多い。

次に造作・施設についての特色を列記する。

畳と筵

- ① 全体的にみれば一般的には筵敷が主流である。
- ② 村の中で畳が使用されている住居の割合は年代が降るに伴って高くなり、畳の使用枚数は年代が降るとともに増えている。

壁・材

- ① 「クサカキ」は、明和期には村全戸の1~2割ほどで使用され、天保期になっても「仮小屋」などに使用されることが多かった。

- ② 明和期には大部分の住居で「かべ」が使用されていたが、天保期になると「ハメ」を使用する例が増え、年代が降るにつれて「ハメ」を多用する傾向が認められる。

建具

宇都宮周辺の村では幕末期に至っても縁の外側に雨戸を設ける例は多くなかった。

格子窓

宇都宮周辺の村では享保期・明和期にはほとんどの住居に格子窓が設けられており、天保期においても全戸数の半数ほどの住居に格子窓があった。

床（とこ）

明和8年の小堤村、天保13年の上横田・屋板村、浮谷村では全戸数の3~5割ほどの住居に床が設けられている。すなわち、江戸時代後期の北関東の農村では一般の百姓家に床を設ける村が珍しくなかった。

収納

明和期には「押込」・「ヲシ入」などの収納場所が3割ほどの住居にみられ、天保13年の浮谷村では「押入」が7割ほどの住居に設けられていた。

囲炉裏と竈

- ① 囲炉裏のない住居はないが、2つある住居が明和8年の小堤村でごく一部、天保13年の上横田・屋板村で2割みられる。

- ② 1箇所囲炉裏を設ける住居では広間あるいは勝手に囲炉裏があり、2箇所に設ける住居では広間あるいは勝手と土間に張り出した板敷とに設けている。

- ③ 竈は、記入もれがあると考えられるが、明和期の箕輪村・小堤村では村内の3~4割の住居で囲炉裏と竈が併用されていた。

湯殿

- ① 明和期の川室新田村・箕輪村・小堤村では村のごく一部の住居だけに「湯殿」・「湯場」がみられる。ところが、文政7年の下蓮田村や天保13年の浮谷村では全戸数の2~3割ほどにみられる。

上雪隠と上湯殿

- ① 上雪隠は、享保12年の鶴田村および明和期の江ヶ崎村・箕輪村・小堤村の名主あるいは庄屋などの村役人の1~2軒の住居にしか設けられていなかったが、文政7年の下蓮田村では1割ほど、天保13年の浮谷村では2割ほどの一般の百姓を含む住居に設けられている。

- ② 上湯殿の例は少なく、天保期に至っても、名主などごく限られた一部の住居にだけみられる。

以上、壁に「クサカキ」を使用する住居が幕末期になっても少数ながら存在したこと、床（とこ）を設けることが珍しくない村がいくつもあったこと、押入を造りつけた住居が天保13年の浮谷村では7割ほどあったことなど興味深いところである。

註

- 1) 拙稿『日光社参史料からみた江戸時代の民家の主屋規模と平面形式』（日本建築学会計画系論文報告集、第413号、1990年7月）、拙稿『日光社参史料からみた分棟型民家の消長』（日本建築学会計画系論文報告集、第416号、1990年10月）、拙稿『日光社参史料からみた江戸時代の主屋規模・平面と階層構成・家族人数の関係』（日本建築学会計画系論文報告集、第418号、1990年12月）。

なお、19冊の住居絵図帳など主な史料は前稿に示した通りである。

- 2) 『日本国語大辞典』（小学館）ろじ（露地・露路・路地）の項には「①おおうものの何もなないむきだしの土地。地面。②門内、または庭内の通路。③建物の間の狭い通路。④茶室に付属する庭のこと」などの意味が記されている。
- 3) 『日本民家語彙集解』（日本建築学会民家語彙集録部会、日外アソシエーツ、1985年10月）
- 4) 『日本国語大辞典』のどじ（土地）の項に「（『どち』とも）『とち（土地）』に同じ」とあり、群馬県利根郡・千葉県安房郡などの方言として「屋内の土間」とある。また、『日

- 本民家語彙集解』には福島県会津地方・群馬県利根郡新治村付近・千葉県安房郡地方・山梨県北地方などの「農家において、主屋内の土間を指す呼称」とある。
- 5) 明和7年の小久喜村住居絵図帳には三室広間型の広間を平面上では分割していないものの、たとえば「勝手間八畳、勝手間六畳」の如く勝手間が2室あるかのように書き込みがある例が14例ある。これらは、建具を入れるまでには至ってはないものの、広間裏寄りにある囲炉裏の煙が表方へ直接流れぬように垂れ壁が造られる如くに広間型から四間取へ改変される過渡期の状態ではないかと考えられる。このような過渡期と考えられる例および完全に分割され四間取になった例のいずれもが床上下手の前側の部屋および後側の部屋を両者ともに「勝手間」としている。
 - 6) 『安永四年乙未七月、百姓家居坪附帳、戸祭筋下横倉村控』（磯野好一家文書）には平面はないが、梁間桁行の間数、総坪数、畳・藁坪数が書き上げられており、安永4年の畳・藁の坪数がわかる。
 - 7) 『文政六年未九月、建家坪数書上ヶ帳、戸祭筋下横倉村』（磯野好一家文書）には平面はないが、総坪数および畳・藁・土間坪数が書き上げられており、文政六年の畳・藁の坪数がわかる。
 - 8) 北関東における農村の荒廃化現象の結果、下野・常陸の両国では天保年間を最低限に享保年間の6割にまで人口が減少している（長倉保他『栃木県の歴史』山川出版社、昭和49年）。
 - 9) ほかに薄縁だけを所持する住居が2軒あるが、これは小規模な住居である。
 - 10) 「ハメ」と記入されることが多いが、上戸祭村の住居絵図帳では「板ハメ」・「羽目」とされることもある。
 - 11) 「クサカキ」・「草カキ」・「草垣」と記されるほか、単に「カキ」とされることもある。上横田村の住居絵図帳には「わらかき」とするものが1例ある。草で作られた壁の例としては茅を使用した秋山地方の例がある。
 - 12) 稲見家住宅は、同家蔵の『家作普請手伝覚帳』より天保9年の建築であることがわかり、住居絵図帳の稲見家の先祖に当たる長重の住居図とよく一致していることが判明している（拙稿「日光社参史料からみた正徳2年および安永4年の下野下横倉村の民家について」日本建築学会大会学術講演梗概集、昭和52年）。
 - 13) 上横田村の長重の住居図では床らしき図が描かれるだけだが、長重住居すなわち稲見家住宅の実測調査によると、それらが床であることが判明する。
 - 14) この部屋を上横田・屋板村では、しばしば「茶間」と称している。
 - 15) 『日本国語大辞典』の「くど」の項には、「かまど。へつつい」のほかに「いろり。炉」という意味もある。また、『日本民家語彙集解』のクドの項には、神奈川県愛甲郡地方などの農家において、「主屋の土間に張り出した板床部分にある炉を指す呼称」としても使われるとある。
 - 16) 『日本国語大辞典』の「かまだん」の項には「物を煮たきする設備。かまど」とあり、埼玉県北足立郡等の方言とある。
 - 17) 小堤村住居絵図帳は2冊からなり、1冊は「見苦敷家之分」は除いて「御上」へ提出しするもとなになった帳簿、もう1冊は提出されなかったが村方の控えとして作成された帳簿である。
 - 18) 『日本国語大辞典』のゆど（湯殿）の項には、「浴場。風呂場。浴室。おゆどの」とある。また、『総合日本民俗語彙』（平凡社）によると、「風呂の水を一時溜めておくところを、和歌山県の熊野や、京都府北桑田郡でもユドノという」とあり、風呂の排水溜りを指すこともあるようである。
 - 19) 『日本民家語彙集解』の湯場の項には「東京都南北多摩地方や千葉県夷隅郡地方などの農家において、浴室を指す呼称。平入り主屋の土間正面入り口の脇に畳1畳分ぐらいの下屋として設ける」とある。また、『日本国語大辞典』によると、「湯のある場所。浴場。湯殿。また温泉場」とある。
 - 20) 部屋の奥の方、または背後などにある便所。来客用のものなど。（『日本国語大辞典』）

（1991年2月10日原稿受理、1991年6月14日採用決定）